

## 『緋文字』に秘された新たな神話

——女性性と男性性の統合——

高 島 まり子

### 序

拙論1から5<sup>1</sup>において筆者はC.G.ユングと彼の高弟E.ノイマンの説を援用して『緋文字』を男性自我ディムズデイルの独立への元型的心理発達過程として——即ち「原両親の分離」<sup>2</sup>から「竜退治」に至る一種の「英雄」神話として——読むことの可能性を論じてきた。その過程で大きな問題となったのは作品における女性性の重要性である。それは強く華やかな面もあるヘスターの人物造形に一見して明らかなばかりでなく、プロットの推進力としての彼女の役割に表われている。より重要なのは後者であって、テキストの発端である姦通とその発覚、更にディムズデイルの告白への転機となったヘスターとの森での会見は、いずれも彼女の積極的な関わりあい抜きでは成立しない。換言すれば、彼女の決定的介入なしにはディムズデイルの「英雄」への成長は有りえず、彼の「英雄」神話は女性性の介入と先導によって男性的価値が獲得される過程なのである。

この点に着目して拙論2では自ら勇敢に独立を獲得する能動的「英雄—自我」ではなく、女性的な力に押しやられ促されて独立を果たす受動的「英雄—自我」ディムズデイルと神話『アモールとプシケー』<sup>3</sup>に登場する男神エロースの共通性を鍵に、ヘスターの側からプロットの展開を追ってみた。その結果、ディムズデイルを成長へと押しやる彼女自身の、プシケーにも似た女性としての心理発達過程が明らかになった。即ち『緋文字』は西洋における男性的自我の発達過程を枠組みとして男性的価値の獲得を描いた作品であるが、その過程と不可分に結びついてそれを支えるのは女性的な心理発達過程のダイナミズムなのである。しかしながらこのような受動的な男性「英雄」を中心とする「英雄」神話の特殊性の意味するところについては、私見では拙論2の末尾に述べたように「プロットを進展させるのがこれら二つの発達（男性的発達と女性的発達）のプロセスの必然的な相互依存にあるとすれば、作者が訴えたかったのは、両者の統合の必要性と言えるのではなからうか」という推測の域を出なかった。本稿では拙論3, 4, 5で考察した「自我」ディムズデイルを取り巻く4つの元型的な力の対立と統合をも視野に入れながら、作者ホーソーンがかくも重視した女性性の意味を更に追求し、特殊な「英雄」神話としての原作を理解するささやかな試みとしたい。

### I

E・ノイマンによると、系統発生的には人類の自我意識の発達には神話に見られる元型的諸段階を通過して達成されたもので、現在の個人もまた同じ発達過程を辿るという。彼は『意識の起源史』におい

て、神話に現われる元型的シンボルを用いて男性の系統発生的な自我発達過程を、＜「ウロボロス＝原両親」→「太母」→「原両親の分離」→「英雄」の「竜退治」→「英雄」による「囚われの女性」と「宝物」の獲得→父権制の開始＞と記述した。また『女性の深層』において女性の系統発生的な自我発達過程を＜「ウロボロス＝原両親」→「太母」→「父権的ウロボロス」→「英雄」による「竜」からの救出→父権制結婚＞と記述した。しかしながらこれは歴史的にも心理的にも母権制から父権制が確立されるまでの過程であって、それ以降更に父権制が発達し、現代の西洋文化圏のようにその発達が極限まで達した時代においては、少々修正を加えなければならないと思われる。即ち、男性的自我発達においては「ウロボロス＝原両親」や「太母」の内容の中に既に確立された父権制における「グレートファーザー」元型の性質が含まれ、「太母」段階の次に「グレートファーザー」段階を置くべきであろう。また女性的な自我発達においては「父権的ウロボロス」の次に「グレートファーザー」元型の段階が入るであろう。

さて、この無意識から意識の獲得に向かう父権的な心理発達の傾向は、当然ながら意識と無意識の分離、そして後者の価値低下と抑圧をもたらす。初めは「英雄」＝「偉大なる個人」によって獲得された精神・意識の世界は、父権制においてそれ以降は固定した集会的な価値として集団の「父」から「息子」へと相続され、文化の実りが成員に等しく享受される。しかしながら決まった教育の過程を通じて相続が制度化された固定的な価値内容は、それが獲得された時点での無意識との戦いにおける最初の生きた情動と意味を失い、究極的には意識と無意識の完全な分裂という結果のみが画一化し、固定化し、人類は遂には人格の平衡を失う危険も出てくる。これについて「この危険を補償するのが元型的なシンボルの働きであり、それに伴う情動の活性化であって、その仲介によって意識は無意識と交流し、平衡を保ち、化石化を免れることができる。」<sup>4</sup>とノイマンは考える。『緋文字』におけるディムズデイルとヘスターの意識発達過程の意味と女性性の重視は、このような父権制の危機とその超克に重要な関わりを持つのではなかろうか。

『緋文字』の社会的背景を成す「共同体」の姿には、父権制の極限に内包される危機が訪れた文化的状況を見ることができる。原作の冒頭で「息子＝自我」ディムズデイルを挟んで「原母」ヘスターに相対した「原父」＝「共同体」（ピューリタン神への信仰の上に成立している「共同体」は、当然ながら背後の神によって权威と支持を与えられている。したがって冒頭では、「原父」として「共同体」と神はほぼ同一視されている。）は、いかにも老いた陰気で冷酷な姿を現わす。堅固で陰気なうえに古いため一層醜い監獄の大戸、ピューリタンの陰惨なまでに厳格な法とサディスティックな刑罰、それを体現しているような不気味な顔つきの看守等は、権威はあっても陰気で冷酷な老父の姿である。それは壮年の抑制と老年の英知を備えていると描写される「共同体」の指導者達の精神が、極端な形で外面化されたものとも言えよう。彼らの想像力の欠如は、当然ながら創造力の衰退につながっている。古い監獄と共に最初から「共同体」に造られた墓地は、永遠の神の国の如き理想国家の建設にふさわしくない死の影を漂わせ、この新天地（老いたヨーロッパの「息子」ともいうべき「共同体」）が既に生命力の枯渇に直面していることを思わせる。それはまた、本来なら生命力の源たる産み育てる性—女性—の男性化として、ヘスターの罪を冷酷に非難する粗野で下品な醜い女達の姿にも表われている。（中に一人だけ、比較的優しく若い母親がヘスターへの同情を示すが、彼女もじきに死んでしまう。）そのような状

況では、その社会の創造の成果であり生命力の象徴でもある子供達も歪んで育つのが当然であろう。「共同体」の子供達は、後に意味も解からぬままヘスター母子をいじめようとし——しかしこの意図は、パールの強烈な反撃にあえなく打ち碎かれるのだが——、インディアン虐待ごっこに興じるのである。

このような「グレートファーザー」の支配下であってヘスターが辿るプシケーの如き女性的心理発達過程がいかなる意味を持つか、考えなければならない。拙論2でヘスターとプシケーの辿った道の類似性については詳述したが、その後の考察によって幾分か加筆、訂正しながらヘスターの成長過程の意味を父権制の危機との関わりから再考したい。

まずプシケーの意識発達過程を、ノイマンに従って簡単に示す。両親の家での娘時代は「ウロボロス＝原両親」から「太母」に至る時期であり、神託に従って悲嘆に暮れながら「死の結婚」を経てエロースという圧倒的な「父権的ウロボロス」に身を任せる。しかしその先に待っていたのは、姿を見せないエロースとの快楽に満ちた「暗闇の楽園」であった。夫の姿を見たいという願いが叶えられないこと以外には幸福な生活を楽しむプシケーであったが、姉達にそそのかされて遂に禁を破って暗闇に火を点し、エロースの姿を見てしまう。この姉達は、男性的支配への「太母」的敵意を象徴するプシケーの「影」である。エロースの「父権的ウロボロス」の魅惑とそれに抵抗する「太母」段階の支配力との葛藤に苦しんだあげく、姉達を媒介とする後者の力に促されて夫の姿（アニムス）を見たプシケーは、自ら無意識の暗闇に意識の光を点す「英雄」として「原両親の分離」を達成したのである。

エロースへの意識的な愛に目覚めた彼女は、彼女の裏切りに怒って「太母」アプロディーテーのもとに飛び去ったエロースを追ってアプロディーテーの激怒に触れ、彼女の与える困難な4つの課題に取り組むこととなる。絶望のあまり自殺の誘惑に負けそうになりながらも、夫への愛の実現だけを夢見て課題を果たしていくプシケーの苦悩に満ちた道程は、意識の確立を目指す女性的な「竜との戦い」にはかならない。最初の3つは「原父」＝「父権的ウロボロス」との戦いである。男性的な意識への志向性を持ちながらも、彼女は無意識的で肯定的な女性原理や女性性と男性性との混在した力等に助けられて課題を成し遂げることができ、そのたびに女性性を損なうことなく男性的な意識面を強化していく。

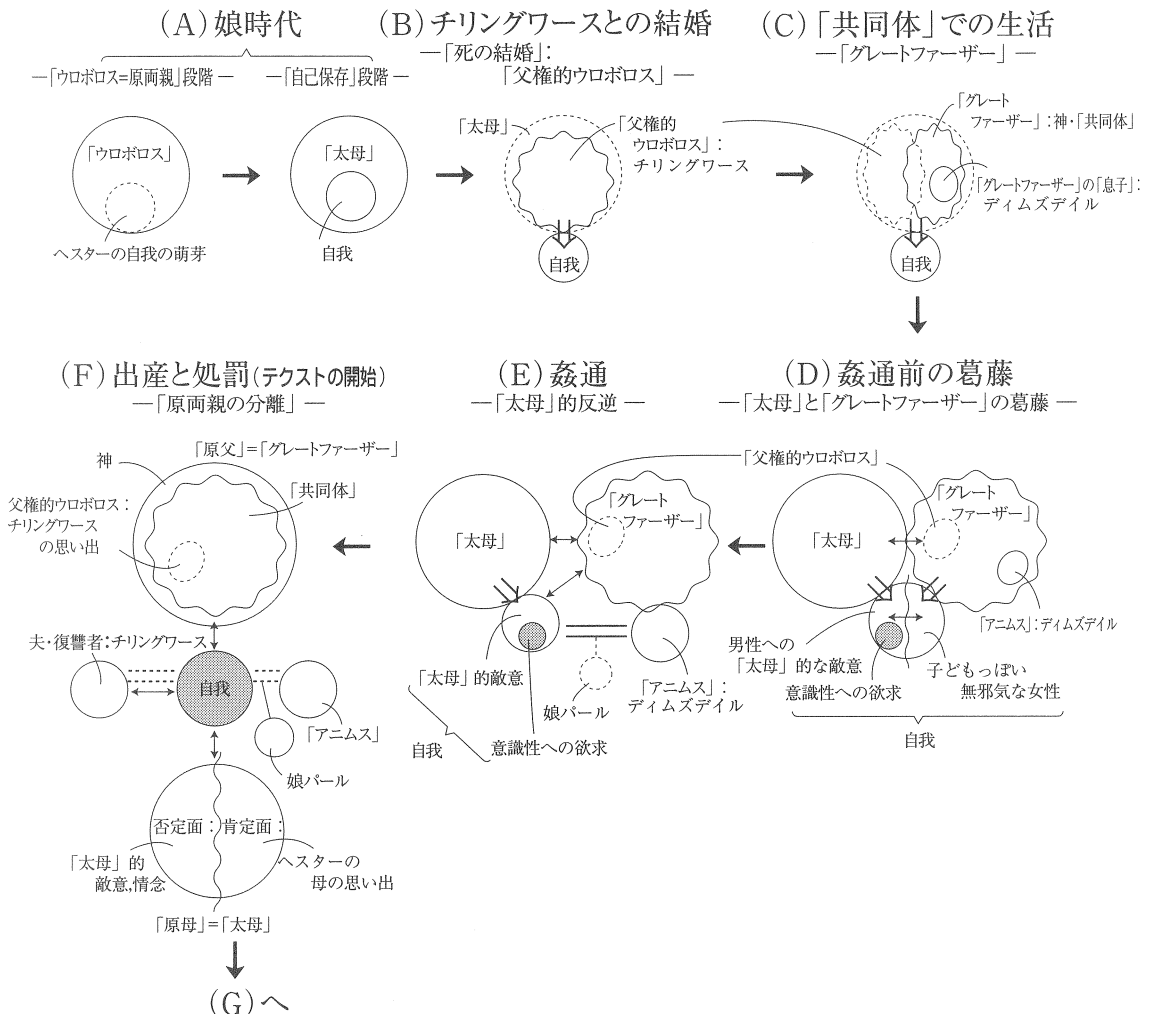
最後の1つは、女性として最も本質的な「原母」＝「太母」との戦いであったが、冥界から死の女神ヘルセポネーの美の入った箱を「太母」アプロディーテーのもとまで運ぶというものであった。プシケーはそれまでに獲得した男性原理に支えられて首尾よく達成するかに見えたが、人間界まで運んだところでエロースの気に入られたいという欲望に負け、美を盗もうと遂に禁を破って箱を覗いてしまい、中に入っていた死の眠りに覆われて倒れる。これは物語の初めに現われる「死の結婚」のテーマの高次の繰り返しであるが、重要な違いは彼女がエロースへの意識的な愛のゆえに死を引き受けたことである。彼女は、それまでに獲得した意識的・男性的価値を自ら主体的に投げ捨てて女性性を選択し、課題に「失敗」する。即ちこの「失敗」は、男性的な「自我一意識」を求める第一歩であった「原両親の分離」において犠牲にせざるを得なかった女性としての全体性たる女性的「自己」に、彼女が愛を通じて再び直結したことを意味するのである。その結果、彼女は意識的な愛の完成と原初的な女性性への回帰によってエロースの完全な男性性を呼び起こし、彼を少年から一人前の男性へ、逃亡者から救済者へと変容させる。「太母」の「息子」であったエロースは、プシケーの愛に動かされて遂に「太母」の支配

を脱し、プシケーを救出すると天なる父神ゼウスの後ろ盾を得て彼女との結婚を果たす。彼女はゼウスによって女神として再生し、月満ちて二人の娘たる女神「喜悦」を出産する。彼女の「失敗」は、「聖なる結婚」と彼らの聖なる娘の誕生という男性性と女性性の結合の最高の形へ、即ち逆説的な勝利へと彼女を導いたのである。

このようなプシケーの心理的発達過程は、その各段階の意味においても全過程を通じての発達の流れにおいてもヘスターのそれと酷似している。それを論じる前にヘスターの発達過程を<図1>に図示しておく。

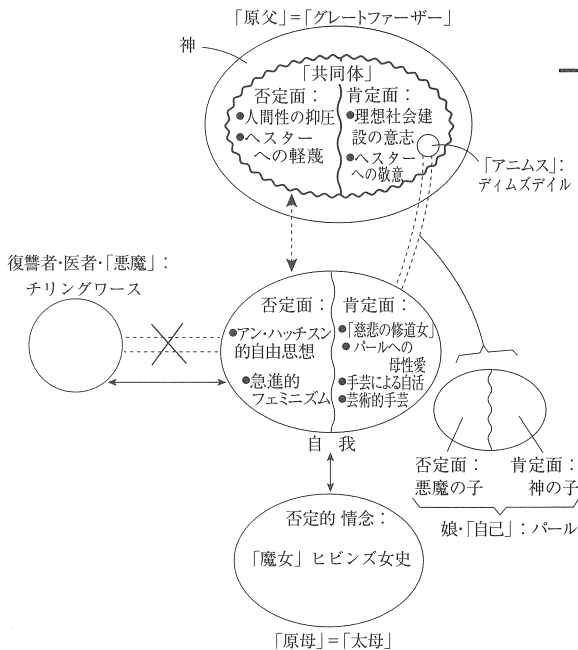
<図1> ヘスターの意識発達過程

==== : 可視的な絆  
 ..... : 隠された絆  
 <====> : 可視的な対立  
 <.....> : 隠された対立  
 =====> : 支配力



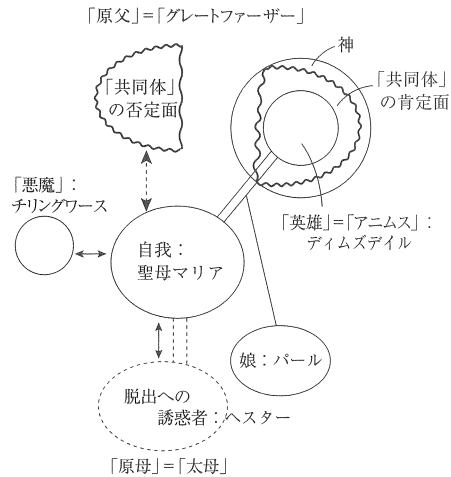
## (G) 7年間

—課題への取組み：「竜との戦い」—



## (H) ディムズデイルの告白

—ヘスターの救出：「英雄」の「竜退治」—



この過程がプシケーのそれと異なる点は、既述したように父権制の極限においては「父権的ウロボロス」の次に「グレートファーザー」の段階が布置されるため、ヘスターの「原両親の分離」は「父権的ウロボロス」の感覚的な「暗闇の楽園」ではなく、「共同体」という「グレートファーザー」の謂わば霊的な「暗闇の楽園」に対して成し遂げられること、「太母」の「息子=愛人」たるエロースが傷ついて逃げ込んだのが「太母」圏であったのに対し（むろん背後には父神ゼウスの存在があるのだが、アプロディーテの直接的な力に比較して影が薄い）、「グレートファーザー」の「息子」たるディムズデイルは「共同体」の支配下に留まったこと、したがってプシケーが「太母」の出す課題に取り組んだのに対し、ヘスターは「共同体」のもとで内なる「太母」の課題に取り組むと共に、「グレートファーザー」の与える苦難に耐えたことがまず挙げられる。しかし以上の3点については、テキストの歴史的背景が母権制か父権制かの違いによるもので、2人の物語が共に無意識から意識への女性的な発達過程を描いたものであるという共通点に比べれば、重大な相違点とは言えない。

次にエロースへの愛と意識性への欲求の萌芽と共にプシケーの胎内に宿り、二人の「聖なる結婚」の後に生まれた彼らの娘に対し、パールはヘスターが姦通によって意識の火を点した時に懐胎され（それを「原両親の分離」の目に見えない開始と捉えることも可能であろう）、彼女の誕生が「原両親の分離」の完成を象徴していることについては、純粋な神話と19世紀に書かれたロマンスの記述上の制約の違いに帰せられよう。更に、エロースとプシケーは「聖なる結婚」によって幸福な結合を成し遂げた

が、ディムズデイルとヘスターは告白によって現世での罪の絆を確認したに過ぎないとも受け取れるという違いがあるが、これは作者ホーソーンが悲劇を創作したということの他に、神話が人類の集合無意識の所産であり、その元型的プロットが現代のロマンスにおいて様々な表現形を持つのは当然であり、その解釈も様々であろうと考えることもできる。

しかし以上の相違点は、プシケーとヘスターの女性的な意識発達過程が男性的なその場合と違って、意識の中心たる自我の強化に収束するのではなく、意識と無意識を合わせた中心たる「自己」を実現する方向へと進んでいくという共通点に比べれば、問題にもならないことである。この「中心志向」による「個性化」の過程は<sup>5</sup>、意識の無意識からの独立を、父権制におけるような意識と無意識の分裂をもたらすことなく実現する。このような女性の自我は女性的な「自己」に直結し、無意識との絆を切断せずに女性性と男性性を結合することによって、人格の全体性を獲得——「自己実現」——しようとするのである。具体的にはそれは、意識への欲求によって無意識の「暗闇の楽園」を捨て、逃げる「アニムス」を意識的な愛によって追い求め（女性性を損なうことなく男性性を忍耐強く自らの内に同化し）、しかも愛のゆえに、獲得した男性的な意識を自ら捨てて女性性を回復することによって逆説的に「アニムス」との結合を果たす（意識的な愛ゆえに、自我を放棄し「自己」につながることによって遂に男性性と女性性の完全な統合を果たす）過程である。父権制において無意識と切れることによって引き起こされる人格分裂の危機に対して、このような「個性化」の過程が大きな救済の可能性を持つことは間違いない。

さてヘスターの場合、プシケーの「失敗」に相当するのは、森でのディムズデイルとの会見である。この場面を逐次見ていくと

(1) ヘスターがチリングワースの正体とディムズデイルへの愛を告白する



(2) ディムズデイルの怒り



(3) ヘスターの謝罪とディムズデイルへの愛の吐露



(4) ディムズデイルの無力とヘスターへのしがみつきの



(5) ディムズデイルを救うための脱出の提案



(6) ヘスターの同行の意思表示



(7) 歓喜に震え、脱出を決意するディムズデイル



(8) 緋文字を投げ捨て、女性的な美を輝かせるヘスター



## (9) パールの抵抗に押されて再び緋文字をつけるヘスター

ここでは後半のヘスターによる脱出の提案と過去の否定(5)と(6)、緋文字を投げ捨て女性的な美を輝かせる彼女の情熱的な姿(8)に焦点が当てられ、彼女の誘惑者としての否定的な評価につながるが多い。しかし私見では拙論2で考察したように、前半の愛の吐露(3)とディムズデイル救出の意図(4)、(5)が脱出の提案に先行していることを基盤に、後半の彼女の言動は愛ゆえに「自我一意識」としての心理発達の成果を捨て、「死の結婚」に始まる「父権的ウロボロス」段階の自己放棄へと意識的に退行する行為と解釈した。(5)から(9)までの彼女の言動に、このプシケー的「失敗」がいかに表われているか見ていきたい。

(5)の彼女の脱出の提案の動機であるディムズデイルへの愛が、決して肉体的レベルのものではなく、自ら「原両親の分離」を成し遂げた成果としての意識的な愛であることを忘れてはならない。それは、夜の処刑台で彼の精神的危機に責任を感じ、チリングワースに慈悲を請うた彼女が、夫の正体を隠していたことを後悔し、それをディムズデイルに告げることがたとえ彼に死をもたらしたとしても現在の空虚な状態よりましだと断言することにも暗示されている。また森の場面で、彼に「あなたの生命をあのように悩ましてきた責め苦の中に、なぜ更に一日もためらっていらっしゃるのです！——その責め苦のためにあなたの意志も行動も鈍くなり——ざんげする力さえなくなっておしまいになったのに！」<sup>6</sup>と嘆き、「ざんげする力」としての「自我一意識」の価値を、彼女が脱出よりむしろ高く評価していることを我知らず語っていることにも読み取れる。

この(1)から(3)に秘められた彼女の意識的な愛は、「私達のしたことには、神聖なものがありました」という彼女の言葉に彼が同意し、二人で手を握りあって腰をおろした時、彼に受け入れられたかに見える。(3)の彼女は、それまで未熟な「息子＝自我」たるディムズデイルの夜の葛藤に現われていた「恐ろしい母」（「太母」の否定面）ではなく、倒れ伏した彼をひたむきな愛で抱きしめるビエタ像の聖母イメージ（第3段階の霊的な「アニマ」像）へと変容している。彼がこの肯定的な「アニマ」像を内面化し——これは心理学的には圧倒的な「太母」像からの「アニマ」の分離と同化であり、神話では「竜退治」における「母殺し」と「囚われの女性」の救済に当たるが、——敵たるチリングワースと戦って自発的に告白を選択すれば、「英雄」としての勝利を獲得できたかもしれない。しかし(4)でディムズデイルの「英雄」としての男性性の欠如は明らかとなり、そうなればヘスターの女性性の発現も異なった様相を呈さざるを得ない。

それが(5)の脱出の提案で、このヘスターには明確に主張し、選択し、決断する第2段階のロマンチックな「アニマ」像が現われている。青山義孝氏<sup>7</sup>の述べるように、(5)の彼女の言動にエマソン流の過去の否定と人間の無限の可能性が主張されており、その主張が作者によって否定されていることも事実であるのは拙論4で述べた。拙論では、これを(8)の情念の暴走と組み合わせて、エマソン流の超絶思想が作者によって否定的な女性性の一つと位置づけられていると考えた。しかし「男性的なものは自我と意識に密着しており、自然や宿命との結び付きといった、母権的意識の根差す深みから、すすんで身を振りほどいてきた。……自我や意志や自由の父権的な強調は、人間を超えた諸力や無意識や宿命の支配、あるいは非我や汝の存在との結びつきといった、女性の体験世界とは、まっこうから対立矛盾す

る。』<sup>8</sup>というノイマンの言葉にもあるように、エマソンの思想は元型的には男性的なものである。それを雄弁に語りディムズデイルを説得するヘスターの姿には、強烈に輝く太陽のような積極的、能動的なイメージがある。それに対して、彼女の説得に動かされるディムズデイルの無力さから躍動感への飛翔は、太陽の光を受けて輝く月のイメージが明らかだ。父権的な太陽と母権的な月のイメージによって、ここでは二人の性の逆転が見られるように思われる。作者がこのロマンチックな「アニマ」像を否定的な女性性の一つと位置づけているのは確かだが、元型的にはこれは行き過ぎた男性原理の発現なのである。

ヘスターの語る自由思想は七年間の社会から疎外された生活によって身に付けたもので、既に作者によって批判されているが、実際には彼女は過激なフェミニズムを含むそのような男性的思想の吸収とは別に、手芸の技術を生かして自活し、パールの養育という母としての仕事に生命力の大半を打ち込んできた。即ち、獲得した男性性は母性愛の内に昇華してきたのである。また「慈悲の修道女」<sup>9</sup>としての暖かい奉仕活動も現実の「共同体」の体制内での改革の一端を担っている。あるいは手芸は単なる生計の手段であるばかりでなく、パールの豪華な衣装に現われているように芸術的な創造活動でもある。これらは謂わば姦通に至った「太母」的な情念の意識的抑制という男性的・父権的発達の方角と、体制の徹底的な破壊にまで到達しかねない男性的な意識の危険な一面性を建設的に緩和する女性的な方角とが彼女の内で出会い、相互に作用しあった結果を示すものと考えられるのだ。彼女の容貌の男性的な変化は、そのような彼女の男性性と女性性の一種の統合とも言える心理的な変容を象徴していると言えよう。プシケーもまた課題を達成する内に、「・・・自我の力が強化されてきたプシケーの道は、男性の英雄のたどる典型的な生涯」であって「彼女の性的な魅力を犠牲にしてまで、このような輝かしい勝利に満ちた男性的な発達を遂げるに至った」<sup>10</sup>と描かれている。

ところが、ここで遂に彼女は破壊的な男性性を露出してしまふ。しかも次の瞬間、(8)で同じ七年間に抱くようになったフェミニズムの思想は放りだし、緋文字を投げ捨てて原初的女性性をあらわにする彼女の姿は、一瞬の内の両極間の揺れを視覚化したものとも思われる。ここに男性的ロゴスと女性的なエロスの極限をあわせ持つ、彼女の両義的な姿がある。そして前者が後者の露出に裏切られ、取って代わられることから、前者がディムズデイルの悲惨な状態を救わんとする愛の一念から出た次善の策であり、(男性的なフェミニズムを放棄していることから推測できるように) 後者こそが彼女の本質的な訴えであることが解る。ここで重要なのは、それほどの男性的な攻撃性を内包しながらも、ヘスターが愛の故に女性的な「自己」と再びしっかりと結合することができたことであろう。彼女は完全な女性性を回復し、ディムズデイルとの「死の結婚」に自分を捧げ尽くして「父権的ウロボロス」段階に意識的に退行しようとするのである。

プシケーにおいては、彼女の死の眠りをぬぐい去って救済してくれるのはエロースであった。しかし(9)でヘスターに再び緋文字をつけさせるのは、パールであってディムズデイルではない。ここで、神話におけるプシケーの「失敗」が2つの要素から成り立っていることに注目したい。彼女はまず冥界から死の美を人間界に持ち帰り、そこで「宝物」を盗もうとするのだ。これは無意識の深層から新たな生命力を意識面に持ち帰る「英雄」の行為の典型であるが、もし冥界で美を盗もうとしたらどうなっていたらうか。ノイマンは無意識から意識面に浮上できないままの死、即ち自我の崩壊の危険を示唆する。し



たがってプシケーの新たな「死の結婚」と「父権的ウロボロス」への意識的な退行は、意識面への帰還の後に為されなければならない。彼女の帰還を可能にしたのは、彼女の懐胎していた子供の存在であると、ノイマンは説明する。この胎児は、彼女がエロースを見たいと望んだ、即ち「暗闇の樂園」から脱出して彼と個人的な愛を結びたいという意識への欲求が目覚めた時、彼女に宿ったエロースとの意識的な愛の象徴である。彼女の内奥の真実であるエロースへの意識的な愛が、彼女の自我を支えたのである。

ヘスターの場合、ディムズデイルへの意識的な愛の象徴はパールである。拙論1で森への往復を「英雄」ディムズデイルの「夜の旅」と定義したが、これはパールを連れしたヘスターにもあてはまる。「夜の旅」の最も深い地点で、彼女は「宝物」を盗む、即ち女性的な「自己」と直結して「死の結婚」に身を委ね、「父権的ウロボロス」に退行してしまう。しかし、プシケーの意識的な愛の象徴たる胎児が彼女を人間界に連れ帰った如く、パールはヘスターを意識面に帰還させるのだ。これが(9)の意味であり、(8)と(9)は一つになってヘスターの「失敗」を未来の勝利につなげるのである。

したがって、彼女の情熱的な行為の本質は断じて誘惑などではなく、女性的な意識発達の前進の一段階なのであり、女性的な「自己」に導かれた「個性化」の過程の肯定的な一歩でもあるのだ。これはプシケーの「失敗」に酷似している。彼女の七年間の男性性と女性性の統合の過程を見直し、また両者の葛藤が極端な形で露出するこの場が彼女の女性性の回復に終わり、しかもそれが最終的なディムズデイルとの絆の修復を含む彼の男性的「竜退治」につながることを考えると、彼女の意識発達の過程がプシケー同様に男性性と女性性の統合にいかに関与しているかがよく理解できるのだ。とすれば彼女の辿った道程は、必然的に無意識と切れてしまう危険性を持つ父権的意識発達の弱点を超克する道として、その価値は測り知れない。

## II

次にヘスターの意識発達過程と不可分に結びついたディムズデイルの発達過程を、拙論1、3で考察した内容をも含めて述べていこう。彼の場合、父権制確立時代の「英雄」神話の枠組みが、特にチリングワースとの「竜との戦い」において色濃く残っている。しかしその戦い方は、ペルセウスのような男性的「英雄」とは非常に違っている。ヘスターの場合に倣って以下に<図2-1><図2-2>として図示する。

図(A)からも解るように、冒頭の処刑台の場では「原父」と「原母」の対立関係の真ん中に立ちすくむ「息子=自我」ディムズデイルの位置に、「原両親の分離」状況が明らかである。ただしI章で述べたように、「原父」＝「グレートファーザー」は可視的には極端な父権制を体現する「共同体」であるため、同じ父親元型でも「共同体」とは違って3つの要素から成るチリングワースの像はそこからはみ出している。また実際に「原両親の分離」を成し遂げたのがヘスターであり、この状況がディムズデイルにとっては不本意な解放であったため、「原父」に対する彼の意識的な反発はここではほとんど見られない。テキストにおいて「息子=自我」と父性原理の絆が強く、彼が自らを「原父」＝「グレートファーザー」とかなり同一視していることが窺われる。それだけテキストの状況が「父権的意識」の徹底を語っていると言えよう。しかし作者は客観的な立場から、「共同体」の様々な否定面を描写する。



このような「原父」からの「息子」のひそかな離反は、ディムズデイルの「炎の舌」の獲得に明白に表われている。上記の「共同体」の自然な人間性への不寛容さや抑圧の強さに対して、彼は自ら罪を犯すことによって人間の弱さや罪の実体を開眼し、人類同胞への深い共感と「炎の舌」<sup>11</sup>の如き雄弁を獲得するに至ったのである。このような人間性への理解は、本来霊的に抜きこんで彼にとって罪の経験なくしてはほとんど到達不可能なことであった。ここに至って「息子＝自我」ディムズデイルが気付かないにせよ、彼と「原父」＝「グレートファーザー」である「共同体」とは大きく分裂したと言えよう。一方「共同体」の肯定的な面は、神への信仰心を基盤としたピューリタン達の理想社会の建設への意志である。既述した「共同体」の否定面も、この肯定的な面に必然的に伴わざるを得ない「影」であるとも考えられる。

更に「原母」ヘスターについては、彼女が自ら「グレートファーザー」・「父権的ウロボロス」・「太母」の「暗闇の楽園」を破壊したのであるから、この時点で実際の彼女は既に意識的な存在である。したがって彼にとって処刑合での彼女は、圧倒的な「太母」像とより人間的な「アニマ」像の融合した存在であると言えよう。ただし、いまだ彼女と緊密な精神的絆を結ぶに至らない彼にとって、——姦通は彼にとって単なる「情熱の罪」に過ぎなかった——「アニマ」としての彼女は性的な面の強調された第1段階の生物学的「アニマ」、あるいは彼の名誉を守るために強い意志と愛で彼の名の告白を拒否する第2段階のロマンチックな「アニマ」<sup>12</sup>に留まっている。そしてエロースと同様に、しばしば意識へと押し出された未熟な「自我」である彼は、いまだ「アニマ」と個人的な関係を持つには至らない。それどころか「太母」の圧倒的な支配力からも独立しておらず、無意識の活動が活性化される夜には、否定的な「太母」の姿で出現するヘスターに対し、孤独なマゾ的苦行によって「息子＝愛人」としての絶望的な抵抗を試みるのである。(A)から(B)にかけて、昼間のヘスターの生命力に溢れた圧倒的な「太母」イメージは徐々に薄れていくが、彼にとって夜の彼女の否定的な「太母」イメージは決して弱まることはなかったように思われる。即ちヘスターは彼にとって「アニマ」でもあり、ヌミノースな「太母」像、そして「恐ろしい母」でもあるのだが、「原父」の優秀な「息子」としての立場からも、既述した未熟さからも、彼はヘスターのいずれの面とも対立せざるを得ない。(そして否定的な「太母」イメージは、彼女に対する「共同体」の冒頭での集合的な見方でもあった。)しかしながら、その対立にも拘わらず彼は過去の秘密の罪の絆の他に、「自我」としての未熟さゆえに、またチリングワースの見出した「強烈な動物的性質」<sup>13</sup>という点でも、豊かな生命力と情念を内包する「太母」ヘスターと現在もひそかな繋がりを持っているのだ。

図(B)は、チリングワースがディムズデイルの秘密の罪を知った後の状況である。プロットの進展に伴って「原父」と「原母」の元型的な分裂が更に進むが、やはりディムズデイルには「共同体」の否定面への意識的な反発はほとんど見られない。ただ「共同体」による彼への聖者のようなペルソナの押しつけは強まるばかりであり、それは明らかに「息子」を「共同体」の支配圏に引き止める力として彼を苦しめるのだ。逆に「共同体」の肯定的な面としては、チリングワースの正体や彼とディムズデイルとの関係への鋭い洞察、あるいは変貌してゆくヘスターへの素朴な尊敬の念等といった人々の洞察力と寛容さが描写されている。

「原母」ヘスターの元型的イメージの分裂は徐々に進み、肯定的な面はパールへの忍耐強い母性愛、

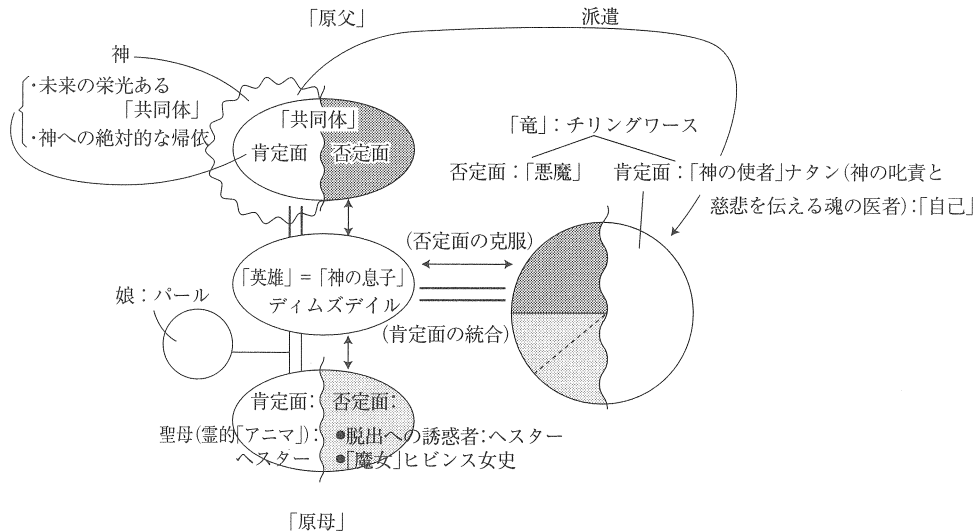
手芸による自活、「慈悲の修道女」としての暖かい奉仕活動等で表わされ、彼女は聖母マリアに象徴される「アニマ」の第3段階（霊的な段階）に近づきつつあると言えよう。逆に「原母」の否定面は相変わらず「恐ろしい母」としてディムズデイルを苦しめるが、「共同体」の見方からこの面が消滅に向かっているであろうことは、彼女への一般的な敬意が高まり、緋文字の意味が‘Able’へと変化していきつつあることから分かる。またアン・ハッチンソン流の社会改革、急進的フェミニズム、超絶主義的な思想などの男性的逸脱傾向（作者はそう考えている）は、ディムズデイルからも「共同体」からも隠されている。以上の4つの元型的な力の対立がテキストの基盤に布置されていることは拙論4で論じた。それにパールとチリングワースが加わって状況がやや複雑化する。拙論5で考察した如く、娘パールは母に対する「苦しみの使者」<sup>14</sup>であるばかりでなく、ディムズデイルにとっても彼の胸を指差したり、昼間にヘスターと3人で処刑台に立ってくれとしつこく迫ったり、森の場面では彼への強烈な反発を示したりすることによって、彼の進むべき意識発達の方向を照らし出す「自己」元型としての役割を果たしている。

更に拙論3で示したように、チリングワースの役割こそディムズデイルが「英雄」として戦わねばならない「竜」元型であることが明らかとなる。彼は既に、ヘスターの夫であり「共同体」から派遣された医者でもある存在から復讐者へと変貌しているが、それだけに留まらない。彼の言動、実際の役割、元型的象徴の布置等の全てから、コキユの復讐の意図という個人的な悪意の背後に、「恐ろしい母」と「恐ろしい精神父」の両方からの使者としての元型的な敵意が透けて見える。まず彼はヨーロッパの伝統的な科学者あるいは錬金術師として、科学力を武器に天なる神に対抗して地上での父権を主張する神への反逆者である。またアメリカの野生の自然を象徴するインディアンから医術を学んだ彼は、ピューリタンの視点から見た自然（「悪魔」の跳梁する場）と通じる存在でもある。この2つの地上的要素は、「太母」圏に属する幾つかの元型的シンボルとあいまって、彼が「恐ろしい地父」であり、「太母」の手先として「息子＝自我」ディムズデイルを無意識の支配下に退行させようとすることを暗示している。具体的には、錬金術とインディアンの医術を用いて彼の衰えゆく肉体を補強し（この点については、チリングワース自身がヘスターに向かって自慢している）、性的妄想を生み出す本能を活性化すること等が考えられる。

また「共同体」から派遣されたピューリタンとしての彼は、秘密の罪についての問答や牧師ディムズデイルへの崇拝を示す言葉によって、彼の罪悪感を刺激しつつ告白を阻止する。即ち「共同体」の戒律を強要しつつ優秀な「息子」としてのペルソナを押しつけることによって「息子」の独立を阻止し、「共同体」の支配下に引き止めようとする「恐ろしい精神父」の役割を果たしているのである。「原父」と「原母」の双方から派遣された使者（集合無意識における「敵対者」元型）には、「原両親」の意図を体現する者として、謂わば「ウロボロス」・「竜」の元型的イメージが似つかわしい。当然ながら、テキストではキリスト教的な「悪魔」イメージが使われている。しかしながら悲劇的にも、テキストの個人的レベルでは、ディムズデイルはチリングワースとヘスターの関係を知らぬばかりに復讐者の個人的な敵意に気付かず、元型的レベルにおいては「竜」の存在に気付かず、したがって「竜との戦い」が既に始まっているにも拘わらず、不毛な苦悩に悶々とするばかりなのだ。

図(C)はディムズデイルの告白が為された状況である。ここに至るまでに既にヘスターとの森の場面

&lt;図2-2&gt;

(C) 罪の告白  
--「竜退治」--

(これについてはⅠ章で考察した)とチリングワースとの再会、選挙祝賀の説教の原稿執筆と実際の説教が終わっている。その一連のプロセスを経て布置された元型的状況がこれである。「原父」の肯定的な面は、ディムズデイルの説教の内容に表われている未来の祝福された「共同体」の姿であろう。それはテキストには具体的に書かれていないが彼が靈感に導かれて書いた神託であり、神によって「共同体」に約束された「高い栄光ある未来」であった。いま一つはディムズデイルの告白によって体现された悔悛した罪人としての態度——神の峻厳な断罪と裁き、人知では測り知れない慈悲と救済を受け入れる態度——即ち神への完全な帰依であろう。彼は自らその態度を受け入れただけでなく、「共同体」にもそれを強く要請している。したがってこの2つは、ディムズデイルの中に統合されてはいても「共同体」においてははまだ実現されていないもの、即ち内包された可能性としての肯定面なのだ。極端な明と暗に分かれて表現されてはいるが、この2つは彼が死を賭して「共同体」に遺した遺産であり、どちらが欠けても不完全になろう。これについてはまた後述する。こうして、「共同体」とほぼ重なり合っていた神の像がいまや明確に「共同体」の否定面から分裂し、肯定面のみを包含することとなる。この神に直結することによって、初めてディムズデイルの告白が可能となったのである。一方、人間性の過度の抑圧という「共同体」の否定面の克服は、ディムズデイルが処刑台に告白に向かう際に、政治と宗教の最高指導者を共に拒否することからも明らかである。

代わりに彼が助けを求めたのは、「原母」の肯定面である第3段階の「アニマ」、即ち「聖母」としてのヘスターであった。これは彼の死の場面がピエタ像に酷似していることに明らかであるが、図(B)において徐々に発達していた面であり、このイメージによって森の場面で彼女が演じることを余儀なくされた誘惑者のイメージ——「原母」の否定面——は克服される。こうして「原両親」に対する直接的な

戦いは終わり、「竜退治」は成し遂げられたのだ。「原両親」の使者であった「竜」チリングワースが退けられ、一挙に生気を失い、じきに死んでしまったのも当然と思われる。彼の内包していた3つの否定面は、「英雄」ディムズデイルによって克服されたのである。

しかし彼の遺産はパールに相続され、彼女の幸福な結婚に貢献したらしいことが語られるし、死後の世界での彼とディムズデイルの和解が暗示される部分もある。またディムズデイルの森での脱出の決意から「竜退治」に至る転回点に、チリングワースとの再会があることから、この再会の一瞬に彼の役割が「悪魔」から「神の使者」ナタン<sup>15</sup>（「自己」元型を象徴する「老賢者」イメージ<sup>16</sup>）に反転したという仮説を拙論3で論じた。この経緯はテキストには聖書の物語とのタイポロジーによって暗示され、キリスト教では恩寵と呼ばれ、ノイマンの説では自我の強化に対応する元型の分解（「英雄」神話では「英雄」の仕事として描かれる過程）に当たると考えられる。こうして否定的な「敵対者」元型・「竜」であったチリングワースにも肯定的な面が布置され、その背後にある神に直結することによって、ディムズデイルは「竜退治」を成し遂げ「英雄」になったのだ。またパールは父母に対する「自己」としての、即ち意識と無意識の活動全体を象徴するテキストの中心としての役割を果たし終えて、一人の人間となることができたのだ。「神の息子」＝「英雄」ディムズデイルを「英雄」へと導いた「神の使者」チリングワースはまた、神の代理であるがゆえに、もう1人の「神の息子」と言えるのかもしれない。（キリスト教においても、本来サタンは神の子の一人であった。）その意味でチリングワースはディムズデイルと共にパールの「父親」でもあり、それゆえディムズデイルが説教と告白という天上的な遺産を遺したのに対し、彼は彼女に地上的な遺産（財産）を遺したとも考えられる。

さてこの元型の分解はどのようにして起こったのか。深層心理学的には、外界に投影していた否定的な「影」<sup>17</sup>が実は自分の内部にあることを認識する、即ち「投影の引き戻し」を読み取ることができる。森の場面で自らをチリングワースの犠牲者と認識したディムズデイルであったが、森からの帰途、次々に悪衝動に襲われるに及んで自分の悪魔的な墮落に思い至り、内なる「影」を認識し始めたと言える。その時点で既に「投影の引き戻し」のメカニズムは作動し始めている。そしてチリングワースと再会した時には、そのメカニズムは完了し、ディムズデイルはもう犠牲者ではなく、自分自身の悪を明確に認識している。あとは意識の中に「影」の攻撃傾向を取り込むことによって、内なる敵に立ち向かうことが初めて可能になるであろう。しかしながらテキストにおいては聖書に置いた片手が示すように、自らの悪の認識とそれと戦う力が神から与えられたものと受け取る場所に、やはり恩寵や靈感の要素が含まれているように思われる。この点についてもう少し考えてみたい。

チリングワースとの再会がもたらした「竜退治」の結果は、現実には説教の原稿作成と実際の説教、そして告白という形で現われた。拙論4で考察したように、説教作成は予期せぬ靈感に導かれ、謂わば恍惚の境地で成し遂げられたロゴスによる創作活動である。これは「税関」の語り手である作者ホーソーン（らしき人物）が自らの創作の秘密とでもいべき想像力の働きについて述べた箇所を連想させる。「月光」に照らされて「我々の見慣れた部屋の床がどこか現実の世界とおとぎの国とのあいだの中立地帯、現実のものと想像のものとが一緒になり、それぞれに相手の性質がしみこんでくるような場所」となる時、それこそ「ロマンスの作者が彼の幻想の客人たちと親しくなるに最もふさわしい環境」<sup>18</sup>なのだと彼は言う。彼の有名な「中立地帯」を生み出すのは「魔法の月光」であるが、月はノイ

マンによれば「母権的意識」の象徴である。

「母権的意識」は「父権的意識」に対して無意識により近く、心の母権的な層に属す「父権的ウロボロスの段階に付随する女性的な意識」<sup>19</sup>だが、「男性にあっても、その心理の女性的な側面たるアニマの活動が活発になったとき、即ち精神的危機や創造の過程において」支配的になる。これは本来「太母」段階に安住していた女性が突然無意識の圧倒的な力に征服される心理的段階であり、「女性的なものが征服される陶酔の体験」、「すべてを捧げ尽くした忘我の感動体験」の中で女性を「自己放棄」の段階に導く。そして「この無意識の侵入が、これにとらえられた人を“懐胎させ”，変容させる」ため、常に創造性をもたらすのだ。<sup>20</sup> 月は無意識の活動と関係が深く、無意識のメッセージを受け入れ、靈感や直感という創造につながる啓示を受け取る。無意識の活動が「父権的意識」には支配できない自律的な時に従い、「月が時を司るもの」であるがゆえに、「母権的意識」段階の自我は月が満ちて無意識から「認識の光が浮かび上がってくる」のを「待ち通す」しかない。しかし、「この秘められた内部世界こそ、女性の人生における創造的な精神世界」に他ならないという。そして、ノイマンも言う如く「創造の人間の文化的な業績がつねに・・・母権的な、受け入れ、内に抱きつづける意識と、父権的な造形する意識との、一つのジュンテーゼである」<sup>21</sup>からには、この無意識的、女性的な「母権的意識」を備えた作家は、無意識的な想像の世界に埋没することなく、また意識的、男性的な現実に縛りつけられることもなく、「中立地帯」でこそロゴスによる創作活動ができるのである。

「税関」には、「語り手」ホーソーンが大文字のAの形の色あせた赤い布を見つけた時の神秘的な描写がある。その文字から流れ出る何か深い測り知れない意味が彼を引きつけ、しかもその布を胸に当てると燃えるような熱を感じたというのである。それが彼にその文字にまつわる物語を創作させるきっかけになったというのだが、この過程はまさに「母権的意識」による創造の過程であろう。肉体的な感覚を伴う緋文字との接触は、彼の「母権的意識」による意味の懐胎であり、テキスト『緋文字』の創作がその出産なのだ。これは、男性でありながら強烈な「母権的意識」を備えた「税関」の「語り手」＝『緋文字』の作者ホーソーンの自画像とも言えよう。

ディムズデイルの靈感に導かれた説教の執筆の描写は、彼にも強烈な「母権的意識」が備わっており、無意識のメッセージを受け取る女性的な資質——「父権的ウロボロス」の段階の受動性——に恵まれていることを暗示する。とすれば徹底的な受動性を持つ「母権的意識」が働き、創作活動の時と同様に月が満ちた時初めて、チリングワースの正体についての認識の光が無意識から彼の意識に浮かび上がってきたのではないか。男性でありながら、彼が深い「母権的意識」を備えた「英雄」であることが、その男性的な「竜退治」が最も受動的に成し遂げられた理由ではないだろうか。「母権的意識」という女性性を備えた男性「英雄」、これが「英雄」ディムズデイルの特殊性であろう。これまで彼が「原両親の分離」段階から「原父」＝「グレートファーザー」としての「共同体」と「原母」としてのヘスター、そして「恐ろしい精神父」と「恐ろしい地父」の混合物である「竜」としてのチリングワースの圧倒的な支配力とすさまじい戦いを続け、遂に「竜退治」を果たすまでの道程が、伝統的な「英雄」神話を下敷きにしていることを述べてきた。しかしながら、元型的には男性的な「竜退治」という「英雄」の行為が最も女性的な意識によって為されたことは、既述した父権制の危機を超克する一つの新しい可能性であろう。「だからこそ、もう一度無意識との結び付きを取り戻すことが、男性にとって

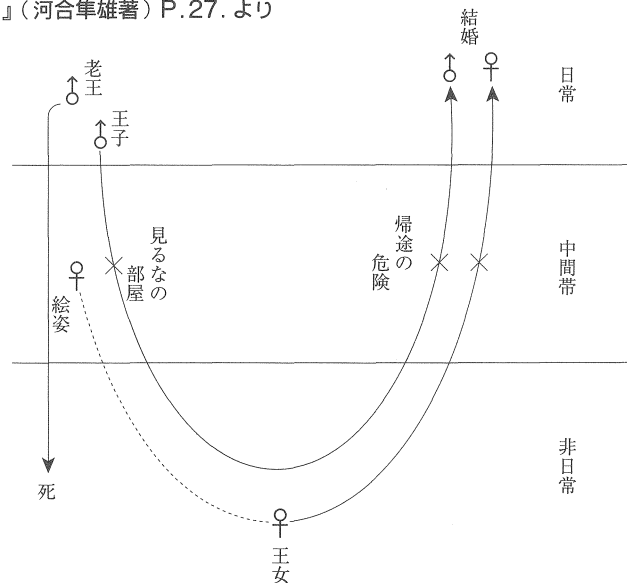
もきわめて重要な意味をもっているのである。しかもこの無意識との新しい連携は、男性の場合、アニメという彼の女性的側面を通して、またそれと結びついた母権的意識を通してしか行なわれない」<sup>22</sup>とノイマンも述べている。ここにもまた、男性性と女性性の結合の重要性が示唆されているのである。

### Ⅲ

Ⅱ章でディムズデイルの「原両親の分離」から「竜退治」に至る道程を辿り、結果的には彼の内なる女性性と男性性の結合を論じることになった。ここでは「竜退治」の成果としての女性性と男性性の統合について、父権制の危機という視点から「原父」と「息子」の関係に焦点を絞って考えてみる。神話の「英雄」の「竜退治」には、その成果としての捕われの「乙女」の救出と素晴らしい「宝物」の獲得がつきもので、たいてい彼はその「乙女」と結婚して新しい王国を建設する。ディムズデイルが「竜退治」において救出した「乙女」と獲得した「宝物」とは何であろうか。それに関連して、『昔話と日本人の心』の中で河合隼雄氏が「忠臣ヨハネス」<sup>23</sup>の話の展開を図示したものが興味深いので<図3>に示しておく。

#### <図3> 忠臣 ヨハネス

『昔話と日本人の心』(河合隼雄著) P.27. より



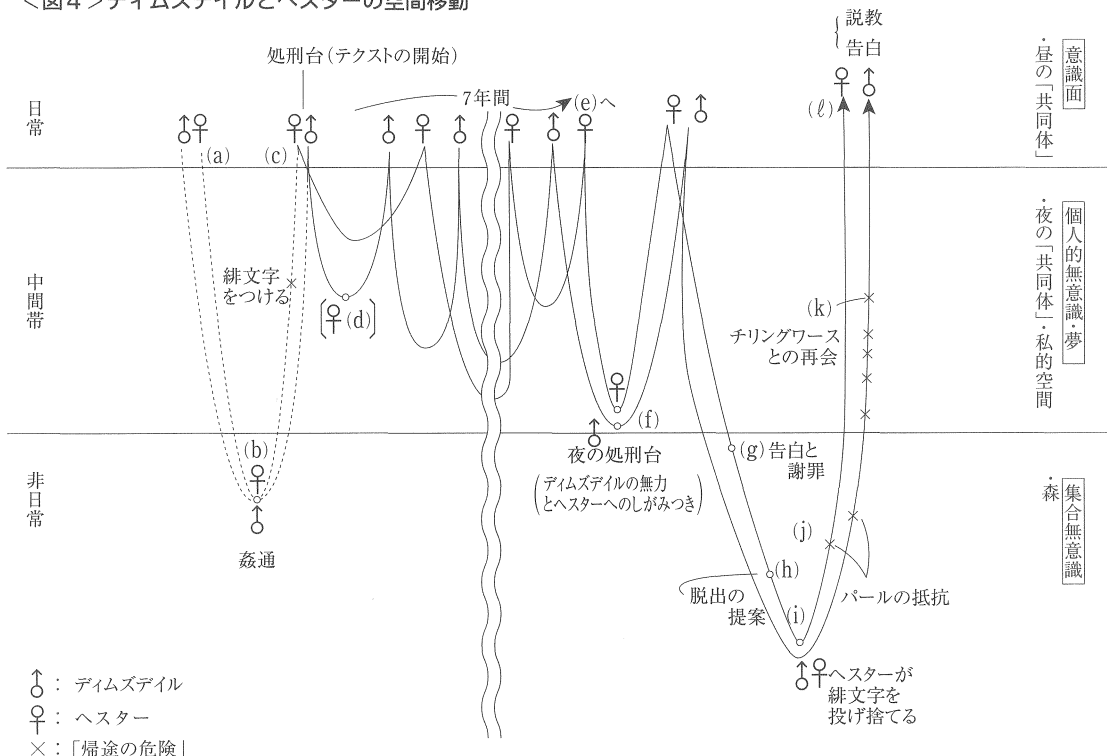
河合隼雄氏は老王の死で始まるこの話を、「それまで優位を保っていた父性原理が生命力を失い、なんらかの意味での革新を迫られている」<sup>24</sup>王国で「息子」が「新しい女性原理を・・・もたらす」物語で、既述したノイマンの説とは異なるが「男性原理の支配する文化における、自我の確立過程を示しているものと考えられる」<sup>25</sup>と述べ、その意味を「男性原理が強く支配するヨーロッパ文化圏において、女性性をいかに獲得し、補償するかという動きを示し・・・男性と女性、日常と非日常の統合によっ



て、以前よりは高次の統合が完成するのである」<sup>26</sup>としている。

「忠臣ヨハネス」の場合の「日常」は、既述した作者の「中立地帯」の描写においては「現実」に、「非日常」は「想像の世界」に、「中間帯」はまさに「中立地帯」に当たると考えられる。深層心理学的には「日常」が「意識」に、「非日常」が「集合無意識」に、そして「中間帯」は双方が出会う場、即ちより意識に近い「個人的無意識」や、あるいは元型の内容が様々なシンボルの形で意識に把握される「夢」の世界に該当するのではなかろうか。王子が王国の日常に連れ帰ろうとした王女は、そのままでは結婚できない。日常と非日常の中間帯で「帰途の危険」を克服することによって、初めて二人の幸福な結婚が可能となる。このことは王女が集合無意識の元型の内容を象徴しており、そのままのヌミノースな姿に直面すれば意識が破壊されかねないことを示しているのであろう。生命力の枯渇した「父権的意識」の世界に生き生きとした女性的な集合無意識の内容を持ち帰るためには、両者の混じりあう個人的無意識の層において、意識に受け入れられる状態にするための操作をすることが必要なのだ。それが「帰途の危険」の克服として描かれているのであろう。伝統的な「英雄」神話の「竜退治」とは違って、謂わば「竜」に捕えられた状態の「乙女」をそのまま王国に連れ帰る途中で、象徴的な「竜退治」をするとも考えられる。しかも「太母」性がすさまじい「竜」の形をとるほどの脅威と感じられぬまでに「父権的意識」が発達し、最初から「太母」像からの「アニマ」の分離が為されていると言えよう。河合氏の指摘のように、これは行き過ぎた父権制の危機を前提としているのであるから。同様の視点からディムズデイルとヘスターの行動を追って<図4>に図示してみる。

<図4>ディムズデイルとヘスターの空間移動



『緋文字』においてはこの三層構造は、上から昼間の「共同体」、夜の「共同体」とディムズデイルの個室（チリングワースの個室とヘスターの村はずれの住居も含められる）、「森」に当たると考えられる。意識の世界である昼間の「共同体」では、三人とも各々のペルソナを身に付けて生活しているが、自分だけの私的な空間ではそれを脱ぎ捨てることも自由だ。個室ではディムズデイルは有徳の牧師ではなく、秘密の罪ゆえの葛藤に悩み、現実と非現実の混じりあったような幻影を見る。彼の中のヘスターも「太母」のヌミノースな支配力を持ち、いまだ独立していない「息子＝自我」は圧倒されて崩壊の危険にさらされるのだが、何とか自らを維持している。ヘスターもまた「共同体」から離れた小屋では、姦婦でも「太母」でも「慈悲の修道女」でもなく、堅実に自活しパールの養育に打ち込む一人の母親に過ぎない。しかし一方でパールの存在の意味の両義性に悩まされ、彼女の目に「悪魔」を見て苦悩し、女性的な情念を芸術的な手芸の創作に昇華しながらも、人知れず男性的で過激な新思想の荒野をさまようのだ。チリングワースも個室では医者としてのペルソナが復讐者の悪魔性を帯びるに任せたあげく、「竜」・「悪魔」の元型的イメージを持つに至るが、自分では気付かない。

「森」が非現実的な集合無意識の層だと考えれば、ヘスターが「太母」的な敵意から姦通に走った場が「森」であっただろうという仮説は、現実味を帯びるし、チリングワースが自らの悪魔への変貌を自覚するのが「森」であることもうなずける。最終的には王子が「非日常」の空間で王女と会ったように、ディムズデイルもヘスターと「森」で再会するのだが、彼らの場合はより複雑なので時間の経過に従って彼女の「アニマ」イメージの変容を追ってみよう。テキスト以前の「共同体」での時期(a)は、1章で述べたノイマン理論の修正に従えば「父権的ウロボロス」から「グレートファーザー」の段階である。姦通(b)が「太母」段階への退行でありながら彼女を意識へと解放したことは既述した。テキストの冒頭の場面(c)では、ディムズデイルにとっては「太母」性を合わせ持つ第1段階の生物学的「アニマ」、あるいは第2段階のロマンチックな「アニマ」であるが、「共同体」にとっては「太母」の否定面（「恐ろしい母」）のみである。それから7年間(e)の時期は、「共同体」の日常的な意識面では徐々に第3段階の霊的な「アニマ」へと近づいていくが、ディムズデイルの個人的無意識のレベル(d)では「アニマ」と「太母」像が混在している。しかし遂に夜の処刑台で会った時(f)には、「ほんとにあの男を見るとわたしの魂はふるえるんだ・・・あの男はだれなんだ？・・・あんたはわたしのためになんにもしてくれられないんですか？・・・」<sup>27</sup>と彼女に恐怖感を訴え、助けを求める彼は、明らかに彼女に霊的な「アニマ」イメージを投影している。

「森」での再会は複雑である。まずヘスターがチリングワースの正体を明かし、ディムズデイルの激怒にひたすら謝罪する時点(g)では、第3段階の霊的な「アニマ」イメージがはっきり現われる。彼女は彼への乙女のごとき純粋でひたむきな愛、しかも母のような忍耐強く寛大な愛を吐露し、ひたすら許しを乞う。あまりの衝撃に倒れ伏したディムズデイルのしかめ面を見るのが怖くて、倒れたままの彼を抱き寄せ、彼の頭を胸に押しつける彼女の姿は、ピエタ像を連想させ、この純愛が彼を救済に導くことを予感させ、彼の告白の場面とタイポロジーを成している。しかし「共同体」脱出を提案する姿(h)は、第2段階のロマンチックな「アニマ」として、一個の人格を明確に主張し、選択し、決断する。そして遂に緋文字を胸から投げ捨てた時点(i)では、意識的に「父権的ウロボロス」に退行し「乙女の頃の希望」<sup>28</sup>を胸にディムズデイルに自らを捧げ尽くそうとするのだ。だがこれはヘスターに緋文字をつける

ことを強要するパールの阻止(j)によって、霊的な「アニマ」イメージへと押し戻される。この時点が、第一の「帰途の危険」の克服であろう。確かにこの状態のヘスターが今すぐ「父権的意識」である「共同体」に受容されるはずもなく、彼女とディムズデイルの絆も意識的な「英雄」の自立を放棄する脱出を前提としたものであれば、「自己」パールに許容されるはずもない。こうして中間帯に戻って来たディムズデイルを、第2の一連の「帰途の危険」が次々と襲う。どうにか内部の悪の衝動に打ち勝って個室に戻ると、遂に「竜」チリングワースが登場するのだ。これが第3の「帰途の危険」だが、そのメカニズムについては既述した。その時点(k)でディムズデイルが霊的な「アニマ」イメージ（聖母マリア）を選択したことは、告白の場(l)で明らかになる。それが、死にゆく彼を抱くヘスターに重ねられたピエタの聖母イメージである。

こうしてみると、ディムズデイルが「竜退治」によって獲得した「乙女」とは、上記の変貌を経た後に第3段階の「アニマ」（聖母）に到達したヘスターに象徴される女性性であろう。では、「宝物」とは何であろうか。ノイマンによれば「英雄」と「乙女」の結婚は、個人的、客観的な解釈でなく、集合的、主観的に解釈すべき内容であって、「乙女」は「こころ」・「アニマ」を象徴し、男性的自我と「アニマ」の結合は、男性的自我が無意識の中の女性性を意識に取り込むことを意味する。男性的自我は受胎し、出産することのできる女性性を内面化することによって、自ら受胎可能に、即ち創造的になる。この「こころ」の創造性が「宝物」なのである。したがって「乙女」を獲得した「英雄」は創造力を我が物とし、あらゆる文化を生み出すことができるのだ。換言すれば、「竜退治」において「乙女」の救出に失敗した「英雄」は、なにも新しいものを生み出すことができないのである。<sup>29</sup>

「忠臣ヨハネス」の場合は、王子は王国を再生するが、ディムズデイルは説教と告白を成し遂げる。すでに考察したように、説教の原稿作成は「母権的意識」の介在した真の創造の過程であったが、そのこと自体、既に彼が無意識レベルで受け入れたヘスターの女性性を、「母権的意識」の強化という形で内面化していることを示す。更に説教の内容は、理想的な「共同体」の再生を予言する希望と栄光に満ちたものであったが、奇跡的な雄弁でこれを告げる彼は、謂わば神の王国の輝かしい再生を予言する神の子の姿に等しい。ところがその雄弁には、罪の許しを願うかのような沈痛な低音が常につきまっており、後の告白を予感させる役割を果たしている。即ち、神の子という明に罪人という暗が不可分に結合しているのだ。またこの暗い面は、王女と結婚して王国を救うという明かるい「英雄」元型に対し、王国の罪をすべて背負ってスケイプ・ゴートとして死んでゆき、王国に再生をもたらす暗い「英雄」元型にも通じる。

告白も両義的である。罪の告白は当然ながらディムズデイルの劣悪な「影」の部分暴露し、彼を飽くまでも人間という有限な存在として地上に引き止めるものである。だが、告白をもたらした神への絶対的な自己放棄の姿勢は、それゆえ逆説的に神に直結し、神を受け入れ、神の栄光を讃えることとなり、彼を天に直結させ、神の子に相応しいものとする。死んで行くディムズデイルのピエタのキリスト・イメージは、そのような反転を意味し、ここでも神の子と罪人、上なる者と下なる者、明と暗の結合が見られるのだ。この結合は、天を目指す意識的、男性的、父権的傾向と、大地を目指す無意識的、女性的、母権的傾向の結合と重なってくる。ディムズデイルは「竜退治」の結果、男性性と「母権的意識」という女性性の統合を成し遂げ、確かに創造性という「宝物」を獲得したと考えられる。そしてそ

の創造性が生み出した成果である説教と告白にも、上記のように男性性と女性性の統合と通じあう対立物の統合、即ち全体性の回復が明確に表われているのである。

#### IV

これまで見てきたように、「忠臣ヨハネス」のような王子と王女の結婚であれ、『緋文字』のような罪の絆であれ、男性性と女性性の真の統合は、生き生きとした創造性とあらゆる対立物の統合による全体性の回復とをもたらし。そしてこのような統合を果たすためには、無意識の深層における両者の出会いと意識面へと戻る時の「帰途の危険」の克服が必要不可欠であることが解る。換言すれば、父権制の危機を救う女性性は無意識の最深部にまで下降しなければ獲得できず、しかも「英雄」との対等の結合によってのみ意識的世界に救済をもたらすことができ、そのためには無意識層における危険な「太母」性を捨てる——女性性の中に意識性・男性性を統合する——必要があるということだ。成熟した父権制において、「英雄」の「竜退治」による女性性と男性性の統合がかくも重視される意味は、非常に危険に満ちたものであろうと、それが個人にとっても社会にとっても真の創造性と全体性を獲得し得る唯一の道であるからに違いない。「男性にとっても女性にとっても、昼と夜、上と下、父権的意識と母権的意識といった対立要素が結合して、それぞれ独自の生産性を発揮し、たがいに補完し合い、実らせ合うようになってはじめて、全一性に到達することもできるのである」<sup>30</sup>とノイマンは述べている。

常に一方に傾くことなく、相反する両極を共に受け入れつつ忍耐強く統合する姿勢こそ、行き過ぎた「父権的意識」の超克への一つの努力であろう。それは『緋文字』においては、特に男性性と女性性の統合として、受動的「英雄」ディムズデルと女神となったプシケーの如きヘスターの辿ったそれぞれの道に、また二つの道の統合の中に、象徴的に表われている。そしてそれは、意識と無意識との「中立地帯」を創造の原点とし、古い布きれの緋文字によってテキスト『緋文字』を懐胎し出産した「税関」の「語り手」から、そのすべてを創造した19世紀の作家ホーソーンにまで共通して認められるものではなかろうか。このような姿勢は、意識と無意識が極端に分裂し、創造的な人間性が枯渇し、人格崩壊の危機に直面しているかのような現在の日本、更には世界の状況にとっても一つの方向性を示唆するものと考えられる。受動的「英雄」ディムズデルと「女神」ヘスターの織りなすテキスト『緋文字』は、新たな神話として20世紀の我々にこそ必要なのではなかろうか。

#### 註

1. 拙論1：「ディムズデルの精神的変貌——自我発達の元型的プロセスについて——」（鹿児島女子短大紀要第26号，1991）

拙論2：「ヘスターとプシケー——『緋文字』に潜む女性的心理発達のプロセス」（同 第29号，1994）

拙論3：「*The Scarlet Letter*における Chillingworth の両義性——＜悪魔＞と＜神の使者＞——」（同 第30号，1995）

拙論4：「英雄神話『緋文字』の意味——執筆の私的要因と社会的要因」（同 第31号，1996）

拙論5：「＜自己＞元型像としての Pearl——元型の対立と統合——」（同 第33号，1998）

2. これも含めて「 」付きの用語はノイマンの『意識の起源史』（上・下）林道義訳（紀伊国屋書店、1984）による。彼の説による人間の意識発達過程に従って主要な元型のシンボルの用語を簡単に説明しておく。

「ウロボロス＝原両親」：全てを包含する無意識の「混沌＝始源」のシンボルで自らの尾を噛む円を成す蛇；人間の「自我＝意識」は無意識の中に包含された胎児の段階でまだ生まれていない。

「太母」：幼児期から少年期の自我が無意識の圧倒的な支配下にある段階；良き母に寄り添う幼児から両義的な母への抵抗や「恐ろしい母」への反抗を試みる少年に至るシンボルによって象徴される。

「原両親の分離」：無意識からの「息子＝自我」の誕生、「ウロボロス＝原両親」からの自我の分離段階；混沌を天と地に分けて世界を創る創造神話に象徴される。

「竜との戦い」：「英雄」による「竜退治」（象徴的な「父殺し」と「母殺し」）と「囚われの乙女」の救出や「宝物」の獲得から成る。

「竜」：リビドーの情性として自我を解体する無意識の力を示す「恐ろしい母」と「息子＝自我」の独立を阻止する古い文化体系を示す「恐ろしい精神父」から成る。

「英雄」：無意識の支配を脱し、独立する意識の中心としての自我のシンボル。

「父権的ウロボロス」：女性的な意識発達過程の「太母」に続く段階で、いまだ「太母」的な無意識の内に保護されていた乙女の意識に、圧倒的で異質な無意識内容が侵入する段階。

母権的：「自我＝意識」が無意識から完全には独立していない段階；無意識と女性的なものが支配的で、意識と男性的なものがいまだ自立と独自性をもつに至らない心の状態。

父権的：意識と無意識とが独立した系統として分離し、無意識に対して十分独立して立ち向かえるようになった男性的な意識が、優位を占めている状態

「母権的意識」：「父権的ウロボロス」の段階に付随する女性的な意識

「父権的意識」：父権的な段階に達した意識

父権制：「父権的意識」によって支えられている文化規範が男性集団を通じて相続される体制

母権制：母権的な価値が女性集団を通じて相続される体制

「グレートファーザー」：父権制の文化規範を担う父元型

3. エリヒ・ノイマン、『アモールとプシケー』、河合隼雄監修、玉谷直美・井上博嗣共訳、（紀要、1989）、以後、プシケーとエロースに関するノイマンの見解を要約した部分は全てこの版による。

4. ノイマン、『意識の起源史』（下）、p. 700.

5. 「中心志向」：「自己」に関係づけられた人格の全体性を達成することをめざす方向

「個性化」：人生の後半期における自己形成の働き、ibid., p. 77.

6. ホーソン、『緋文字』、刈田元司訳、（旺文社、1967）p. 249.

7. 青山義孝、『ホーソン研究——時間と空間と終末論的創造力——』（英宝社、1991）

8. ノイマン、『女性の深層』松代洋一訳（紀伊国屋書店、1989）、p. 117.

9. ホーソン、*op. cit.*, p. 200.

10. ノイマン、『アモールとプシケー』、p. 157.

11. ホーソン、*op. cit.*, p. 174.

12. 河合隼雄、『ユング心理学入門』（培風館、1990）、pp. 204-8.

第1段階：生物学的アニマ、第2段階：ロマンチックなアニマ、第3段階：霊的なアニマ、第4段階：叡知のアニマ。分析の過程においてアニマは以上の4段階を経て発展するのが観察されるという。

13. ホーソン、*op. cit.*, p. 158.

14. *Ibid.*, p. 324.

15. *Ibid.*, p. 154.

16. 河合隼雄, *op. cit.*, pp. 219-228.  
「自己」：意識と無意識を含んだ心の全体性であると同時にその統合の機能の中心  
「老賢者」：「自己」元型像の一つ, 知恵深い老人の姿をしている。
17. *Ibid.*, pp. 101-112.
18. ホーソン, *op. cit.*, p. 47.
19. ノイマン, 『女性の深層』, *op. cit.*, 80.
20. *Ibid.*, pp. 27-29.
21. *Ibid.*, p. 125.
22. *Ibid.*, p. 131.
23. 河合隼雄, 『昔話と日本人の心』(岩波書店, 1991), pp. 26-28.
24. *Ibid.*, p. 27.
25. *Ibid.*, p. 28.
26. *Loc. cit.*
27. ホーソン, *op. cit.*, p. 193.
28. *Ibid.*, p. 256.
29. ノイマン, 『意識の起源史』(上), pp. 287-297.
30. ノイマン, 『女性の深層』, p. 131.

### 参考文献

- ナサニエル・ホーソーン, 『緋文字』刈田元司訳(旺文社, 1967年)
- C. G. ユング, 『人間と象徴』河合隼雄監訳(河出書房新社, 1994年)
- エリッヒ・ノイマン『意識の起源史』(上)(下)林 道義訳(紀伊国屋書店, 1984年)
- エリッヒ・ノイマン, 『アモールとプシケー』河合隼雄監修 玉谷直美・井上博継共訳(紀伊国屋書店, 1989年)
- エリッヒ・ノイマン『女性の深層』松代洋一・鎌田輝男共訳(紀伊国屋書店, 1989)
- ジョン・A・サンフォード, 『見えざる異性』長田光展訳(創元社, 1995年)
- D・H・ロレンス, 『D・H・ロレンス——アメリカ古典文学研究』酒本雅之訳(研究社, 1974年)
- レスリー・A・フィードラー, 『アメリカ小説における愛と死』佐伯彰一他訳(新潮社, 1989年)
- R. W. B. ルーイス, 『アメリカのアダム』斎藤 光訳(研究社, 1973年)
- 青山義孝, 『ホーソン研究——時間と空間と終末論的想像力——』(英宝社, 1991年)
- 大井浩二, 『ホーソン論』(南雲堂, 1974年)
- 河合隼雄, 『昔話と日本人の心』(岩波書店, 1982年)
- 『ユング心理学入門』(培風館, 1990年)
- 『とりかへばや 男と女』(新潮社, 1991年)
- 『昔話の深層』(講談社+α文庫, 1994年)
- 『母性社会日本の病理』(中央公論社, 1976年)
- 私市保彦, 『幻想物語の文法』(晶文社, 1994年)
- 湯浅泰雄, 『ユングとキリスト教』(講談社, 1996年)
- 馬場謙一他編, 『母親の深層』, (有斐閣, 1984年)
- 越川芳明編, 『アメリカ文学のヒーロー』(成美堂, 1991年)
- 酒本雅之, 『アメリカ文学をどう読み解くか』(中教出版, 1978年)